日语拟声拟态词的语音象征之探究

RIYU NISHENGNITAICI DE YUYIN XIANGZHENG ZHI TANJIU

王莹 著

南開大學出版社

日语拟声拟态词的语音象征之探究

日本語のオノマトペにおける
音象徴に関する研究

王　莹　著

南開大學出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

日语拟声拟态词的语音象征之探究 / 王莹著. —天津：南开大学出版社，2020.5
ISBN 978-7-310-05933-1

Ⅰ. ①日… Ⅱ. ①王… Ⅲ. ①日语—象声词—研究 Ⅳ. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2020)第 060667 号

版权所有　侵权必究

日语拟声拟态词的语音象征之探究
RIYU NISHENG NITAI CI DE YUYIN
XIANGZHENG ZHI TANJIU

南开大学出版社出版发行
出版人:陈　敬
地址:天津市南开区卫津路 94 号　　邮政编码:300071
营销部电话:(022)23508339　营销部传真:(022)23508542
http://www.nkup.com.cn

北京京华虎彩印刷有限公司印刷　全国各地新华书店经销
2020 年 5 月第 1 版　　2020 年 5 月第 1 次印刷
260×185 毫米　16 开本　12.5 印张　280 千字
定价:48.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23508339

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本书得到教育部人文社会科学研究青年基金项目资助（汉日拟声拟态词综合对比研究，15YJC740090）以及 2017 年天津科技大学人文社科类青年拔尖人才培养项目资助。

前書き

日本語のオノマトペは、日本語教育で系統的に学ばれることが少ない。しかし、日本人の会話の中や、現代日本文化、特にマンガやアニメの中でも頻用されているため十分に理解し、楽しみたいと感じる日本語学習者が多い。また、日本語母語話者にとって、オノマトペはほかの言葉とは異なり、指示対象と言葉が恣意的な関係にあるとは思えず、自分の内在的な気持ちや感覚と有縁的な言葉だという印象がある。しかし、それを説明し、類似した意味のオノマトペの違いを明確に説明することは困難である場合が多いし、解釈の個人差や地域差も存在する。さらに、語源論的な要素も様々に関係している分野である。

本研究書はそうした厄介な面のある日本語のオノマトペについて、多様な視点から実証的な分析を行ったもので、専門書として読み応えのある良書である。

様々な調査対象の人々にオノマトペについて意味微分法（Semantic Differential Method）的な感覚評価を求め、音象徴という視点を加えて綿密な分析を行っている。日本語母語話者だけでなく、中国人日本語学習者で各オノマトペの意味が分かる者と分からない者を対象とし、感覚評価のデータから統計的分析を試み、考察を加えたもので、非常に意欲的な研究と言える。

結果として、「有声子音」と「無声子音」の対立のあるオノマトペについては、どの言語の話者も共通して「強さ」「重さ」の次元の音象徴を感じている点や、各言語個別の音の象徴性を多数示すことができている。また、オノマトペを視覚的に提示した場合と聴覚的に提示した場合では、日本語母語話者の感覚評価はほぼ一定しているのに対し、中国人学習者では、提示手法によってオノマトペに対し抱く印象にかなりの差異があることが示された。その理由を両言語の音韻上の差異にあり、日本語と中国（北京）語では、前者が有声子音と無声子音が対立しているのに対し、後者では無気音と有気音であり、中国人学習者に日本語のオノマトペを視覚提示した場合、中国語の音韻体系に沿って知覚するが、聴覚的に提示した場合には、母語との体系の違いから推測的なばらつきの多い知覚になるため、感覚的な評価にも誤った知覚や個人差が反映されることを突きとめている。

筆者の王瑩さんは、博士前期課程、博士後期課程を通じて、私の研究室において一貫してオノマトペの研究を続けてきた。その成果として、博士号が与えられ、また、本研究の内容の一部は 2011 年に「中国留日同学会第 13 回留日成果論文集優秀論文賞」受賞している。

今回研究結果を刊行することとなったことは、指導教員としてもこの上ない喜びである。今後も研究・教育に邁進されることを祈念しつつ前書きとしたい。

首都大学東京 教授
西郡仁朗
2018 年 8 月

目　次

第 1 章　序章 …… 1
1.1　はじめに …… 1
1.2　本研究の目的 …… 2
1.3　本研究の意義 …… 3
1.4　本研究における調査の概要 …… 5
1.4.1　刺激語の選定 …… 5
1.4.2　評価項目 …… 8
1.4.3　被験者の構成 …… 8
1.4.4　研究方法 …… 9
1.5　本書の構成および分析の枠組み …… 11
第 2 章　先行研究 …… 13
2.1　日本語のオノマトペ …… 13
2.1.1　日本語のオノマトペの定義 …… 13
2.1.2　日本語のオノマトペの形態 …… 15
2.2　中国語のオノマトペ …… 21
2.2.1　中国語のオノマトペの定義 …… 22
2.2.2　中国語のオノマトペの形態 …… 22
2.3　中国語話者による日本語のオノマトペの学習や翻訳における問題点 …… 24
2.3.1　中国語話者による日本語のオノマトペの学習における問題点 …… 24
2.3.2　中国語話者による日本語のオノマトペの翻訳における問題点 …… 25
2.4　音象徴に関する先行研究 …… 32
2.5　日本語のオノマトペが含む音象徴に関する先行研究 …… 33
2.5.1　金田一春彦（1978）の解説 …… 33
2.5.2　Hamano（1998）の研究 …… 34
2.5.3　日本語母語話者のみを調査対象とした研究 …… 36
2.5.4　日本語母語話者と非日本語母語話者の両方を調査対象とした研究 …… 37
2.6　日本語のオノマトペにおける音象徴に関する先行研究の課題 …… 38

第 3 章　「視覚提示」による日本語のオノマトペに対する感覚評価……40
3.1　はじめに……40
3.1.1　本章の研究背景……40
3.1.2　先行研究とその問題点……41
3.1.3　研究の目的と方法……41
3.1.4　被験者の構成及び調査期間……43
3.2　調査結果の全体像……44
3.2.1　各刺激語についての日・中両言語話者による評価の平均値……44
3.2.2　各刺激語についての日・中両言語話者による評価の相関……47
3.3　C_1 が「有声音・無声音」であるオノマトペに対する感覚評価……49
3.3.1　日本語話者の場合……50
3.3.2　中国語話者（CLS1）の場合……51
3.3.3　中国語話者（CLS2）の場合……52
3.3.4　日中両言語話者の比較……53
3.4　C_1 が/h/-/b/-/p/であるオノマトペに対する感覚評価……59
3.4.1　日本語話者の場合……60
3.4.2　中国語話者（CLS1）の場合……62
3.4.3　中国語話者（CLS2）の場合……63
3.4.4　日中両言語話者の比較……65
3.5　「反復形・非反復形」であるオノマトペに対する感覚評価……68
3.5.1　日本語話者の場合……69
3.5.2　中国語話者（CLS1）の場合……70
3.5.3　中国語話者（CLS2）の場合……71
3.5.4　日中両言語話者の比較……72
3.6　探索的因子分析……75
3.6.1　日本語話者による評価（JLS）の因子分析結果と因子命名……76
3.6.2　中国語話者による評価（CLS1）の因子分析結果と因子命名……77
3.6.3　中国語話者による評価（CLS2）の因子分析結果と因子命名……78
3.6.4　日中両言語話者の比較……79
3.7　まとめ……81
第 4 章　「聴覚提示」による日本語のオノマトペに対する感覚評価……83
4.1　はじめに……83
4.1.1　本章の研究背景……83
4.1.2　先行研究とその問題点……84
4.1.3　研究の目的と刺激語、評価項目……85
4.1.4　予備調査……86

4.1.5　本調査……87
4.1.6　分析方法……87
4.2　調査結果の全体像……88
4.2.1　各刺激語についての日・中両言語話者による評価の平均値……88
4.2.2　各刺激語についての日・中両言語話者による評価の相関……90
4.3　C_1が「有声音・無声音」であるオノマトペに対する感覚評価……92
4.3.1　日本語話者の場合……93
4.3.2　中国語話者の場合……94
4.3.3　日中両言語話者の比較……95
4.4　C_1が/h/-/b/-/p/であるオノマトペに対する感覚評価……100
4.4.1　日本語話者の場合……100
4.4.2　中国語話者の場合……102
4.4.3　日中両言語話者の比較……103
4.5　「反復形・非反復形」であるオノマトペに対する感覚評価……107
4.5.1　日本語話者の場合……108
4.5.2　中国語話者の場合……109
4.5.3　日中両言語話者の比較……110
4.6　探索的因子分析……113
4.6.1　日本語話者による評価（JLH）の因子分析結果と因子命名……113
4.6.2　中国語話者による評価（CLH）の因子分析結果と因子命名……115
4.6.3　日中両言語話者の比較……116
4.7　まとめ……117

第5章　異なる提示手法が日中両言語話者の評価に与える影響……120

5.1　はじめに……120
5.1.1　本章の研究背景……120
5.1.2　先行研究とその問題点……120
5.1.3　研究の目的と刺激語、評価項目……121
5.1.4　分析対象……122
5.2　異なる提示手法が日本語話者の評価に与える影響……123
5.2.1　各刺激語についての評価の平均値……123
5.2.2　各刺激語についての評価の相関……124
5.2.3　C_1が「有声音・無声音」であるオノマトペに対する感覚評価……126
5.2.4　C_1が/h/-/b/-/p/であるオノマトペに対する感覚評価……129
5.2.5　「反復形・非反復形」であるオノマトペに対する感覚評価……132
5.2.6　探索的因子分析……135
5.3　異なる提示手法が中国語話者の評価に与える影響……137

5.3.1　各刺激語についての評価の平均値……137
5.3.2　各刺激語についての評価の相関……140
5.3.3　C_1が「有気音・無気音」であるオノマトペに対する感覚評価……141
5.3.4　C_1が/h/-/b/-/p/であるオノマトペに対する感覚評価……144
5.3.5　「反復形・非反復形」であるオノマトペに対する感覚評価……148
5.3.6　探索的因子分析……151
5.4　まとめ……153

第 6 章　終章……156

参考文献……163

添付資料……168

一、擬音語・擬態語についてのアンケート（視覚調査・日本語版）……168
二、擬音語・擬態語についてのアンケートの一部（視覚調査・中国語版）……181
三、擬音語・擬態語についてのアンケートの一部（聴覚調査・日本語版）……183
四、擬音語・擬態語についてのアンケートの一部（聴覚調査・中国語版）……186

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第 1 章　序章

本章では、日本語のオノマトペを概観し、本研究の目的と意義、調査の概要、研究方法および本研究の構成について述べる。

1. 1　はじめに

日本語のオノマトペは、日本人の様々な生活の場において頻繁に使われている。日本語はオノマトペに富んだ言語であり、日本語学習者が日本語を正しく理解するための不可欠な要素であると言われている（泉, 1976；玉村, 1989；田守, 2002）。しかし、玉村（1989）によれば、オノマトペはほとんどの日本語学習者にとって習得困難な事項の一つとして挙げられている。

数年間日本語を学んでいる日本語学習者であっても、日本語の小説や新聞、マンガ、ドラマを見たり、日本人の会話などを聞いたりする際、その場で理解できず自ら辞書を調べたことが多い。それは語彙知識の不足、特に日本人の生活に密接な関連があるオノマトペについての知識が乏しいことが大きな原因であった。

一般の語彙に含まれている音と意味とは直接的な関係がなく、恣意的であると言われているが、日本語の擬音語・擬態語においては、音と意味とは「ある程度合理的な結び付きがある。」（金田一，1978）と言われている。

（1）ドアをトントンと叩く。

（2）ドアをドンドンと叩く。

（1）と（2）を中国語に翻訳すると、ともに「“咚咚”地敲门」になる。それに対して、（1）と（2）を比べてみると、多くの日本人が濁音の「ドンドン」は清音の「トントン」より、ドアを叩く音の大きいこと、力の強いことをイメージできるのではないだろうか。このように、音が象徴的な意味を表すことを音象徴（sound symbolism）と呼ぶ。音象徴はものの音や様子などを表す語であるオノマトペにおいて顕著に見られる。

日本語の「清音」と「濁音」について、泉（1976）は以下のように述べている。

清音が軽やかであり、濁音は重い。そこで、清音との対立で用いられた濁音は、外界の音なら、重い音、にぶい音、大きな音などを表わし、動作・状態なら、強い

こと、大きいこと、重いこと、乱暴なことなどを表わす傾向があるようだ。(泉, 1976)

以上のような「清音」と「濁音」との対立は日本語、特に日本語の擬音語・擬態語において顕著に見られる。

Hamano（1998）は、「音象徴を巡る議論は、しばしば素人の関心を集めるが、言語学者はそれを疑いながら受け取るのが普通である。(原文英語、筆者訳)」と指摘した。

音声学から考えると、例文（1）と（2）は、(1）の「トントン」の無声破裂音の/t/は、(2）の「ドンドン」の有声破裂音の/d/と対立するように、日本語のオノマトペにおいて「無声音」・「有声音」の対立により、「音の大きさや関わっている動作の活発さなどさまざまなニュアンスの相違を表している」（田守，2002)。

従来の日本語擬音語・擬態語についての研究は、主にその形態や意味を巡って検討したものであり、擬音語・擬態語と音象徴に関する研究もあるが、これらの研究のほとんどは研究者（日本語母語話者）が自らの語感や直感により思弁的に日本語の擬音語・擬態語の音象徴の体系を詳しく分析したもの（Hamano, 1998）や、日本語話者を調査対象とし擬音語・擬態語に対する感覚評価を調査したもの（中野, 1978 ; 1979）である。日本語と英語との間の共感覚的音象徴に関する研究（岩崎他, 2007）も行われたが、管見の限りでは、中国人日本語学習者による日本語のオノマトペに対しての感覚評価についての研究はあまり見られない。

中国人日本語学習者が習得しにくいオノマトペに対してどのような感覚を抱くかを調べ、そして、それと日本語母語話者の感覚とはどのような異同があるかを実証的に検討していくことは、オノマトペが含む音象徴のどのような部分が中国人日本語学習者にとって難しいかを見出すことにつながる。それによって、学習者が捉え難い音象徴の側面を強調して教えれば、難関であるオノマトペの学習に役立つと考えられる。また、日中両言語話者の語感的な部分での共通点と相違点を明らかにすることを通して、中国語を学ぶ日本語話者にとっても、中国語の理解を新たな面で深められるであろう。

なお、日本語では有声音と無声音が対立しているのに対し、中国語では有気音と無気音とが対立している。このような両言語おける音韻、また弁別特徴による違いは、日本語の擬音語・擬態語を感覚的に評価する際にどのような影響を与えるかについても検討する必要がある。

1.2　本研究の目的

本研究では、36 の日本語のオノマトペを刺激語とし、SD 法①を用いて 10 の評価項

① SD 法（Semantic Differential）：Osgood et al.(1957)が提案した意味の測定法で、相反する意味を持つ形容詞の対の尺度を複数用いて被験者に評価させるもの。

目について、日本語母語話者と中国北京語話者①それぞれが「視覚提示」と「聴覚提示」により感覚的にどのように評価するかを調査し、中国語話者と日本語母語話者との感覚評価の共通点と相違点を明らかにする。なお、異なる提示手法による感覚評価の異同についても分析する。また、刺激語の第一音節にある子音（C_1）②および語形（「反復形」・「非反復形」）により見られる音象徴の普遍性と個別性を検討し、音声学の側面からそれに影響を及ぼす要因を探る。さらに、日本語母語話者の 36 語の日本語のオノマトペに対する感覚評価、中国北京語話者の 36 語の日本語のオノマトペに対する感覚評価のそれぞれについて、因子分析を行うことにより、日中両言語話者が刺激語としての日本語のオノマトペに対して、どのような印象を抱くかについて検討する。

具体的な研究目的は以下の 6 点である。

①日本語のオノマトペに対して、日本語母語話者が「視覚提示」と「聴覚提示」により感覚的にどのように評価するか、また、異なる提示手法による感覚評価の異同を明らかにする。

②日本語のオノマトペに対して、中国北京語話者が「視覚提示」と「聴覚提示」により感覚的にどのように評価するか、また、異なる提示手法による感覚評価の異同を明らかにする。

③刺激語の第一音節にある子音（C_1）が有声音か無声音か（なお、中国語話者にとっては無気音と有気音となる。）により見られる音象徴の普遍的な側面と個別的な側面を検討し、音声学の面からそれに影響を及ぼす要因を探る。

④第一音節にある子音（C_1）が/h/−/b/−/p/である刺激語に対する日本語母語話者と中国語話者との感覚評価における共通点と相違点を明らかにし、五十音図中音韻的に特別な関係にある「半濁音」の/p/、および/h/、/b/との関係を確認する。

⑤語形（「反復形」・「非反復形」）により見られる音象徴の言語間での普遍的な側面と個別的な側面を検討する。

⑥因子分析を行うことにより、日中両言語話者が刺激語としての日本語のオノマトペに対して、どのような印象を抱くかについて検討する。

1.3　本研究の意義

日本語のオノマトペには音象徴が存在するのか、存在するならば、それは何か、ま

① 北京語は、中国の北京で話される中国語の方言である。「普通話」と呼ばれる中国語の標準語は北京の発音を基本としており、これを俗に「中国語」＝「北京語」と呼ぶ場合が多い。中国では、「北京語」以外に方言が数多く存在している。本研究では、方言の影響を考慮し、被験者の母方言を「北京語」に統一することができたので、「中国北京語話者」を「中国語話者」に略称する。

② Hamano（1998）は、日本語の子音を C、母音を V で示し、日本語のオノマトペを子音・母音 CV（例えば/pi/）タイプと子音・母音・子音・母音 $C_1V_1C_2V_2$（例えば/pika/）タイプに分けた。本研究では、Hamano（1998）の表記法を用い、C_1 は第一音節の子音を表す。

た非日本語母語話者である中国人日本語学習者がこのような音象徴を捉えられるのか、すなわち、日本語のオノマトペが含む音象徴の普遍的な側面と個別的な側面を明らかにする本研究は、日本語教育学や認知言語心理学等の学術分野の中で、以下の面で意義があると考えられる。

①日本語のオノマトペには音象徴が存在するのかに関する考察

②日本語のオノマトペが含む音象徴の普遍的な側面と個別的な側面に関する考察

③日本語のオノマトペが含む音象徴から見た子音「有声音・無声音」及び「/h/-/b/-/p/」の対立関係に関する一考察

④日本語のオノマトペに見られる音象徴は音声学的基盤を持つかに関する考察

日本語学習者が習得しにくいオノマトペに対してどのような感覚を抱くかを調べ、そして、それと日本語母語話者の感覚とはどのような異同があるかを実証的に検討していく本研究は、日本語のオノマトペが含む音象徴は何か、また中国人日本語学習者も日本語母語話者と同様に捉える音象徴の普遍的な側面は何かを明らかにする。このような研究成果は日本語学および日中対照言語学の分野に貢献できると考えられる。

また、日本語母語話者のみに捉えられた音象徴の個別的な側面は何かを明らかにすることによって、日本語のオノマトペが含む音象徴のどのような部分が日本語学習者にとって難しいかを見出すことができる。それに従って、日本語教育現場でのオノマトペの指導にあたって、学習者が捉え難い音象徴の側面を強調して教えれば、習得が困難なオノマトペの学習に役立つと思われる。

さらに、日本語の中で清音と濁音とが対立するように、子音の/h/-/b/-/p/に関しては、/h/が/b/と対立し、/p/が半濁音として特殊な位置をとっている。しかし、音声学から考えると、無声破裂音の/p/は有声破裂音の/b/と対立するため、/h/は特殊な位置づけとなる。本研究は、日本語に実在するオノマトペに見られる音象徴的な特徴から、日本語母語話者がこの 3 者の間の対立関係をどのように捉えているかを確認しようとするものである。また、日中両言語話者による捉え方を比較することにより、日中対照言語学や日本語教育学での音声教育などにも応用できると考える。

最後に、子音では、日本語は無声無気音/p, t, k/と有声無気音/b, d, g/とが対立しているのに対し、中国語（北京語）は無声有気音/p^h, t^h, k^h/と無声無気音/p, t, k/とが対立し、有声無気音/b, d, g/は無声無気音/p, t, k/の異音として存在している。本研究は、このような子音の弁別特徴が、日本語のオノマトペに対して感覚的に評価する際に影響を与えるかどうかについて検討していく。つまり、日本語のオノマトペに見られる音象徴に音声学的な説明を与えることができるかを追究する本研究は、音象徴の研究分野にも新たな貢献ができ、その応用価値が高いと思われる。

1.4　本研究における調査の概要

本研究では、36 語の日本語のオノマトペを刺激語とし、10 評価項目について日本語母語話者と中国語話者を対象に、「視覚提示」によるアンケート調査、「聴覚提示」によるアンケート調査という二つの方法をとる。以下、本研究の調査で使用された刺激語、評価項目および被験者について示す。

1.4.1　刺激語の選定

1.4.1.1　「視覚提示」による調査の刺激語の選定

これまでの擬音語・擬態語に関する研究では、「清音・濁音」の対立をめぐったものが多い（泉, 1976；金田一, 1978；田守, 2002；中野, 1978, 1979；丹野, 2005；岩崎, 2007 など）。また、日本語の擬音語・擬態語には同音の反復（畳語）の形をとるものが圧倒的に多い（泉, 1976）。本研究も、上述の「清音・濁音」と「畳語」に焦点を置き、以下の手順で刺激語の選定を行った。

まず、泉（1976）は「カラ」という要素を基本のヴァリエーションと考え、擬音語・擬態語の形態を「基本形」以外の 7 種類に分類したが、本研究ではそのうち、「繰返し音」、「清濁音の対立」、「リ音」の 3 形態が同時に存在することを条件とし、刺激語の範囲を「カ行」、「サ行」、「タ行」、「ハ行」、「ガ行」、「ザ行」、「ダ行」、「バ行」、「パ行」で始まる語に限定した。①

刺激語の選定にあたって、以下の三つの先行研究に選定されている擬音語・擬態語を参考にして、本研究の刺激語の原案とした。

（1）玉村（1989）で、日本語教育において扱われるべき擬音語・擬態語として選定した最重要語18語と重要語42語、合計60語。

最重要語――18語

ちょっと	ちょうど	はっきり	ゆっくり	がっかり	もっと
きちんと	ちっとも	ちゃんと	びっくり	しっかり	ずっと
すっかり	にこにこ	ぼんやり	ようやく	やっと	きっと

重要語――42語

うっかり	つい	どんどん	ぴったり	あっさり	あべこべ
アハハ	いらいら	うんと	きっぱり	きらきら	ぎっくり
ぎょっと	ぐずぐず	ぐっすり	ぐるっと	こっそり	さっさと
さっぱり	ざっと	じっと	すっきり	すらすら	ずらり

① 泉（1976）は「カラ」という要素を基本にしたヴァリエーションと考え、さらに様々なヴァリエーションを作り出すパターンがあると述べ、日本語の擬音語・擬態語を「基本形」（カラ）、「ツメル音」（カラッ）、「ハネル音」（カラン）、「引ク音」（フワ→フワー）、「リ音」（カラリ）、「繰り返し」（カラカラ）、「音の一部交替」（カラコロ）、「清濁音の対立」（カラカラとガラガラ）と分類している。

ずるずる	そっくり	そっと	そろそろ	たっぷり	でこぼこ
どきどき	どっと	はっと	ハハハ	ばらばら	ぱっと
ぴかぴか	ふと	ふらふら	ぺらぺら	ほっと	まごまご

（2）三上（2007）で、①意味や用法の習得が比較的容易であるか、②母語話者の言語生活における使用頻度が高く、学習者が、各種印刷媒体、メディア等において遭遇する可能性が高いか、③基本的な動詞・形容詞・名詞と共起し、比較的やさしい文型・文脈において用いることができるか、④学習者がそのオノマトペを習得して実際に使う機会が多くあるか、また新聞や雑誌、シナリオ集、漫画などの一般言語資料における使用状況も参考にしながら語の取捨選択を行った結果、「基本オノマトペ」の試案として提示した70語。

基本オノマトペ――70語

あっさり	いらいら	うっかり	うろうろ	うんざり	がたがた
がっかり	がやがや	からから	がんがん	きちんと	ぎっしり
きらきら	ぎりぎり	ぐっすり	ぐっと	くるくる	ぐるぐる
げらげら	こっそり	ごろごろ	ざあざあ	さっさと	さっと
ざっと	さっぱり	さらさら	しっかり	じっくり	じっと
じろじろ	すっかり	すっきり	すっと	すらすら	ずらり
そっくり	そっと	そろそろ	ぞろぞろ	たっぷり	ちゃんと
どきどき	どっと	どんどん	にこにこ	のろのろ	のんびり
ばたばた	はっきり	ばったり	はっと	ぱっと	はらはら
ばらばら	ぴかぴか	びっくり	ぴったり	ふと	ふらふら
ぶらぶら	ぶるぶる	ぺこぺこ	ぺらぺら	ぼうっと	ほっと
ぼんやり	ゆっくり	わくわく	めちゃくちゃ		

（3）丹野（2005）で、日本語の清音と濁音の違いを明らかにするために、刺激語として使用した畳語の擬音語・擬態語 34 語（清音 17 語、濁音 17 語）。

刺激語――34語（清音の語17語、濁音の語17語）

かさかさ	がさがさ	きしきし	ぎしぎし	くさくさ	ぐさぐさ
けたけた	げたげた	こそこそ	ごそごそ	さくさく	ざくざく
しくしく	じくじく	すかすか	ずかずか	そろそろ	ぞろぞろ
たらたら	だらだら	てかてか	でかでか	とくとく	どくどく
はらはら	ばらばら	ひくひく	びくびく	ふかふか	ぶかぶか
へたへた	べたべた	ほかほか	ぼかぼか		

上記までの選定では「リ音」の形態の語が不足しているので、次に、『擬音語・擬態語 4500　日本語オノマトペ辞典』（小野, 2007）により意味確認をしてから、選定した「清音」・「濁音」の語根からなる「リ音」の擬音語・擬態語を補填した。

最後に、本研究の刺激語を 36 語（清音で始まる 16 語、同濁音 16 語、同半濁音 4 語）に選定した。以下表 1−1 で本研究の刺激語を示す。

表 1-1　本研究の刺激語

	有声音		無声音			
反復	/d/	だらだら どろどろ	/t/	たらたら とろとろ		
	/b/	ばらばら べたべた	/p/	ぱらぱら ぺたぺた	/h/①	はらはら へたへた
	/g/	ぎらぎら ぐるぐる	/k/	きらきら くるくる		
	/z/	ずるずる ぞろぞろ	/s/	するする そろそろ		
非反復	/d/	だらり どろり	/t/	たらり とろり		
	/b/	ばらり べたり	/p/	ぱらり ぺたり	/h/	はらり へたり
	/g/	ぎらり ぐるり	/k/	きらり くるり		
	/z/	ずるり ぞろり	/s/	するり そろり		

1.4.1.2　「聴覚提示」による調査の音声データの作成

「聴覚提示」による調査では、被験者に各刺激語の発音を聞かせてから評価してもらうので、音声データを作成した。まず、ネイティブスピーカー（男女各 1 名、東京方言話者）により自然なスピードで上述の「視覚提示」による調査で選定された 36 語の刺激語を、男女 1 回ずつ読み上げてもらった。次に、筆者が音声編集ソフト Praat を用いて 90s/語セット（男女 15 回ずつ読み上げた）のデータと 60s/語セット（男女 10 回ずつ読み上げた）のデータ、2 種類を作成した。さらに、適切な音声データを作成するために、予備調査②を行った。最後に、予備調査で現れた問題点を改善し、本調査で使用した音声データを作成した。以下、「聴覚提示」による調査の音声データの詳細を示す。

①一語セットの長さ：60s

②一単語あたり読み上げた回数：10 回（＜男 1 回＋女 1 回＞×5 回）

③一単語前後の提示音：シグナル（前・後各 1 回）

④男女声の間の間隔：1. 5s

① ハ行のうち「フ」の子音は両唇摩擦音、「ヒ」の子音は硬口蓋摩擦音、「ハ・ヘ・ホ」の子音は声門摩擦音であるが、本研究では「ハ」と「ヘ」のみを扱っている。

② 予備調査の詳細は第 4 章を参照されたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com